
小説 祈り

hentai be-sisuto

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小説 祈り

【Zコード】

Z3307P

【作者名】

hentaibessisuto

【あらすじ】

短編小説です。短編です。

「そういえば、私の『神様仏様』は結構あたるんだよ」

とりあえず私のジンクスを自慢してみる。へえーっていう素つ気ない返事が返ってくる。

お弁当を食べ終わつた昼休み。私の友達が委員会で教室にいないから私は後ろの席の　に話しかけた。　は読書をしていたが、私が席に着くと顔を上げたので、言つてみたのだ。『神様仏様……』つて祈ると本当に良くあたるのである。ちょっとした超能力でないかと少し自分でも疑つていたりする。

「ホントに結構あたるんだよ？ 昨日の国語の小テストだつてよかつたじゃん。あと先週の小テストもよかつたしね」

「それはただ国語が得意なだけじゃないか？」

それは一理あるかもしない。じゃあ、と私は言つて、

「先週の金曜は雨が降つたし、木曜は国語の時間教科書を使わなかつたし。水曜は、先生が順番であてるのに、私だけ飛ばされることもあつたし」

「そうかい、そうかい」

流された。本に目線を落とされる。

ちなみにこいつは昼休み一人でいるけど友達がいない訳じゃない。

今も教室の片隅で読書をしてる友人がいる。本当にご飯を食べている間だけ一緒にいて、その友人は食べ終えると自分の席へ戻つて読書をする。そうするこいつも読書をする。移動教室の時よく話しているようだから、仲が悪いってわけじゃないさうだけど。

「そのジンクスにはね、一つ制限があるのでですよ」

ほう、とは言つて視線を上げて、私の目と合つた。

「その心は？」

「一日一回しか使えないのです」

私は少し含ませた言い方をしてみた。

「どこかのアニメの誰かにいつだか使われてそうな何かのよつな氣がなぜかするね、そりゃ」

苦笑交じりの返答だった。私はさつきと同じ口調で、「じゃあ、何か祈ってみせましょ」

「ふむ、では何かお願ひをしましょうか」「

が同じノリで相手の手を入れてくれる。

思いついた私は、あ、と言つて、

「今日、　　が足の小指をぶつけたて祈つとくわ

なんだかとつてもあたる氣がする。

「はつ、それは上等だねえ」

口端を上げて、　　が答える。瞳が活き活きしている。

「それならどつちの足の小指だい？ 右、左？」

が条件を厳しくしようとする。意地の悪いやつだ。

「私としては、　　が小指ぶつければいいのよ。それだけ」「でもどつちかつて言つとどつち？」

なおも　　は食い下がってきた。私はふん、と鼻を鳴らして言つてやつた。

「思いつくり強くぶつかるわ」

次の日の朝。席にいた私は、　　は荷物を机に掛けながら言つた。

「おい。あたつたよ、あたつた。ドアにぶつけちましたよ喜々として話しかけられる。本当にあたつちやつたのかと私は内心驚いた。　　は私が何か言つ前に続けて言つた。

「思いつくりぶつけた時、マジ笑つたよ！ まじで。ホントに笑えたなあ。ヤバいほど笑つた。あんなに笑つたのは一週間ぶりくらいかな」

そう言つ　　はすつごい笑顔で笑つてた。私は小指をぶつけてそん

なに嬉しいものかなと疑問に思つた。

「どつちの足だつたの？」

私は聞いた。

「右だよ、右。右つて祈つたのか？神様仏様に」

「別に。ただ強くぶつかれつて祈つただけよ」

それにしても は嬉しそうにしている。気持ちが悪い。そんなに 嬉しいなら毎日指をぶつければいいのにね。

「なんでそんなに嬉しそうなのよ？」

「え？ ああ。そりやあ普通じゃありえないからだよ。確率が低いことが起きたら無条件で笑えて仕方ないんだ。言つてもわからんだけうけど」

ふーん、と私は相槌を打つ。本当によくわかんない。

「じゃあ、もつかいやつてあげようか？」

私の提案を はあつさり断つた。

「いや、いいよ。一回だけやってくれりゃあ十分。それに二回目は 無さそうだし」

「やうね」

私も成功しそうな気がしないし。そして、そういうときはあたらなしのだ。あたりそもそもないなあとか思つちやつと祈つても決してあたらない。その時の感情というかノリがないとあたらないつてこともなんとなく実感してるし。

「いやー、それにしてもすげえなあ。まじあたつちやううんだもんなあ」

なんだうつ。褒められてるのか、どうなのかだけど、ここまで言わると微妙に恥ずかしくなつてきた。

私は話をそらすことにした。

同じ日の昼休み。私はひとしきり友達と話をしちやつて、昼休みも終わりに近いから使つていた席を戻して、自分の席に戻つた。なに

かのお菓子を食べながら本を読んでいる　　「話しかける。

「なに食べてるの？」

何か分かつてゐるけど、とつあえず聞く。

「トッポ」

短い答えが返つてくる。やつゝ、と答へ、一拍置いて私は尋ねる。

「一本食べていい？」

うー、と　　は本に目を落としたままつづいた。

私はホイホイとトッポを一本つまんで、ポリポリかじる。かじつていてふと思いつく。

「そういうえば、この前す」「こおこしお菓子食べたんだ」

「ふむ」

「明日持つてきてあげよつか」

そこで　　はやつと顔を上げた。耳がびくつて動いた氣すらするけどね。私は魚を釣りあげたような氣になつた。

「おお、そりゃありがたい」

「じゃあ、持つてきてあげるよ。お楽しみに」

ははー、よしなによしなにー、と　　が言つ。前と後ろ合つてないから。

学校から自転車で帰つてると、そういうえばお菓子の約束があつたことを思つ出した。少し道を外してコンビニに向かう。あるといなあ、と思いつつ、この時こそ神様仏様だね、と一人で勝手に納得する。そして自転車をこぎながら、祈るのだ。

果たして、コンビニに田舎のお菓子は置いてあつた。やつた！ラッキーと心の中で手を合わせた。

良い気分でコンビニを出で、軽快に自転車を飛ばして家に帰つた。

少しだけ、我が家が私の目に入つてきた。ふーと息をついている

と、家の前に一人女の人がいる。タクシーもある。近くに寄ると近所のおばさんだった。なにかそわそわしている。そして私を見つめているようだ。

私は自転車で近づきながら、少し遠かつたけれど声をかけた。

「どうかしましたか？」

おばさんはとても落ち着きがなく、それでいて口から言葉を出すのに戸惑っていた。私はおばさんの近くで自転車にまたがったまま口が開くのを待つた。おばさんは躊躇いながら、言いにくそうに言った。

「あのね、ちゃん。あの、お母さんがね、事故に遭つてね。今病院で、重症らしいって。だから、このタクシーで病院にいきましたよ」

はっ！？ 頭の中は一瞬でクラッシュしたけど、私は迅速に動いていた。自転車を私の家の敷地の中に停めて、鍵をかけて、タクシ－に乗り込んで、病院に行つた。

車のなかではなにも考えられなかつた。そんな、まさかって考えがくるくる回つて、頭が真っ白だつた。車の外の景色も、車の中の臭いも、隣のおばさんも、なにもかもが私を刺激しなかつた。病院の建物がちらつと視界に入つた時、はつとした。ざわざわつとした胸騒ぎが下の方から湧いてきて、病院につくまで私を浮足立たせて、時間を長く感じさせた。病院に近づくにつれて、私は焦り出して、その焦りはどんどん私の中で大きくなつていつた。タクシーがどこに停まるの、どこに着けるの！って声にしないで叫んだ。

タクシーが停まつて、支払いは後でしますのでとおばさんが断つて先に降りて、こつちと、言つた。私はおばさんの後について、小走りで外来用の入り口に向かつた。おばさんが案内係に場所を聞くと、ナースさんが出てきて速足で道案内をしてくれた。病院の臭いが私の中のざわめきをひどく大きくさせた。

緊急の手術室の隣の部屋に案内されて、そこにはおにいちゃんがいた。三つ並んだベッドの一つの傍のパイプ椅子座つっていて、私を

見ると立ち上がった。私は駆け寄つて、聞いた。

「お母さん、どうなの？」

おにいちゃんは顔を苦くして、

「よくはわからない」

とだけ答えた。

私は治まらず、もう一度聞いた。

「お母さん……どうなのよ、

厳しい顔のお兄ちゃんが私の皿をじりと見つめて言つた。

「……状態が良くなつてことと、危なつて事以外、分からない」
私はふつと脱力したようにこわばつてた頬が緩んで、目尻に涙が浮かんだ。息を呑み込めなくなつて、体はこわばつて動かなくて、私はその場に立ちすくんだ。

しんと静かな部屋の中おもむろに、お兄ちゃんはまた元のパイプ椅子に座り、腿に肘をついて手握り合わせ、額をのせた。おばさんは私の背に手をそつとあてて、おにいちゃんとベッドを一つ挟むようにしてもう一つのベッドに私を座らせた。私をベッドに座らせてからおばさんは少し離れた場所で、うつむいていたが、しばらくして部屋を出て行つた。

部屋の中はしんと静まり返り、病院の独特的の臭いがしていた。私はただ、うつむいて、自分の靴下とローファーの間の辺りを見つめていた。何も考えていなかつた。頭の中は真っ白なホワイトボードをずーっとただ見つめているような状態だつた。まるで血の流れる音が聞こえてきそうな空虚さの中に私はいた。

ガシャンと大きな音が隣でした。私はビクッと身を縮め込ませた。顔を手術室へのドアに向けて、そこで意識が戻つた。いろいろな思考が溢れ出し、不安が頭の中を埋め尽くした。感情が吹き荒れて、私は頬がこわばり、涙が眼に溜まつた。

お母さんが死んじゃつたらどうしようつて、私は手をぎゅっと握

り合わせて、お母さんが生きてくれる事を祈った。おかあさんの事だけをただただ、祈つた。不安なんて無視して祈り続けた。お願いです、お母さんが無事でありますように。お願いします。お医者さんがんばってください、お母さんを助けてください。お母さん生きてください。神様仏様、どうかお母さんが一命を取り留めるようにしてください。お願いします。どうか、死なないようにしてください。どうか、一命を取り留めるまよつに。お願いします。生きてください。お母さん、お母さん、お母さん。だれか、神様仏様、助けてください。神様仏様。

ここでジンクスを思い出した。ぐだらないつて私は一蹴した。しょせんくだらない考え方だつて、どつかに放り捨てた。でもいくら必死に祈つてもしこりが残つて、それが不安をどんどん大きくしていつた。しょせんジンクスだつて言つたつて、一日一回とお母さんの生き死になんて関係ないつて。でもそう言い聞かせても言い訳じみていて。なにか私はどうしようもなくなつてきて、お母さんの事を祈ろうとしても、なんか上手くできなくて、私は混乱していつた。その後悔し出して、どうしてあの時祈つたんだろうつて思いだして、でもそんなの下らないつて否定もして、ジンクスなんて嘘だつて、まやかしだつて必死に思いこもうとして、それで祈つて。でも、混乱しちゃつて。あんなお菓子の約束するんじゃなかつたとか後悔までして、そういうのが嫌で嫌で、関係ないのに思つちゃつてでも、どうしようもなくて。それでも祈ろうとして。不安で、不安でたまらなくて、体中がぞわぞわしてきて、重いものを強く強く押しつけられたような気がして、私はくしゃくしゃになつていつた。

泣きだしたくなつて、頭をくしゃくしゃに掻きむしりたくなつて、体中汗ばんで、手なんてべとべとで、もうなにがなんだか全くわからなくて、そんな状態でいて……。その時にお兄ちゃんが私の前でしゃがんで、私の手をそつと両手で包みこんで切ない笑顔を見させてくれて、それで私は全てがすっと引っ込んで、ひつくつて一回しゃくつて、泣きだした。涙がボロボロ溢れてきて、何度もしゃくりあ

げて泣いた。それからしばらく泣いて、嗚咽もだいぶ治まってきた時、手術室のドアが開いて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3307p/>

小説 祈り

2010年12月6日03時48分発行